

【やや黄色い熱をおびた旅人】

5

紅い花

1997年7月

ジュネーヴ
(スイス)

原田宗典

ホテルの正面玄関前には、黒のフェラーリが一台、停まっていた。

今までに見たことのない車種だった。私はその官能的な曲線を描く車体を間近に眺めて、しばらくの間、目で酔いしれた。

ジュネーヴの国際空港からタクシーに乗って、私たちはレマン湖のほとりに建つホテルに到着したところだった。タクシーの運転手はお喋り好きな中年女性で、行先を告げると、あらあ、あれは素敵なホテルよ、と請け合うのだった。だって前の国連の事務総長だったガリ氏が常宿にしてたくらいなんだから。もちろん私は泊まったことなんてないけど。そう言って彼女は楽しそうに笑い、でも私ね来月からメルセデスに乗り換えるのよ、と自分の話をし始めるのだった。今、彼女が乗っているプ

ジョーヤルノーなどは少数派で、ジュネーヴのタクシーと言えば大半がメルセデスなのだ。三十分ほどの道中、彼女はいかにメルセデスが優れた車であるのかを、延々と話し続けた。ようやく目的地のホテルに到着し、料金を払う段になっても、彼女はメルセデスの最小回転半径についての解説を続けていた。ディレクターのT君にそのお相手を任せ、私は先に降りて外の空気を吸った。

既に真夜中に近い時刻だった。やや肌寒い風が吹いている。

大きく伸びをしてから、ふとタクシーの後ろの暗がりへ目をやる——と、そこに件の黒いフェラーリが停まっていたのである。うつとりと目を奪われているところへ、ようやくタクシーからT君が降りてきた。彼は私の視線の先を追って、フェラーリに目を止めるなり、へええと感心

した声を上げた。

「フェラーリのマラネロじゃないですか。へえ、あるところにはあるもんだなあ」

「珍しい車種なんだ？」

「そりゃあそうですよ。日本にも一台入ってるか入ってないかでしよう、マラネロは。僕も雑誌でしか見たことありませんよ」

「……マラネロ」

私は小さく声に出して呟いた。フォークにねっとり絡んでくるパスタみたいな響きだ。きつと何億円もする車なのだろう。そんな高級車が当たり前のように行き交うのが、ジュネーヴという街なのだ。

その夜、私が泊まったのは、例のタクシー運転手が言っていた「ガリ元国連事務総長の部屋」だった。

客室内の品の好い豪華さは、私を少なからず驚かせた。決してきらびやかではないのだが、調度品はもとより、扉の把手や洋服掛けの金具ひとつにいたるまで、もしかしたら灰皿の傍らに置いてあるマッチの軸までもが、最上級の品質を感じさせた。

ベッドルームの他にリビングや会議室まで備えたこのただっ広い部屋に、私は一人で泊まるのだった。一泊で幾らくらいするのだろうか？ などと下世話なことを考えてしまう自分が、何だか気恥ずかしい。ルームチャージの値段を気にするような奴が泊まる部屋ではないのだ。場違いな感じがして、腰が落ちつかない。室内のあちこちで立ったり座った

りした後、私はリビングの壁に嵌めころした冷蔵庫の存在に気づいて、扉を開けた。ミネラルウォーターからシャンパンまで、いかにも高級そうな銘柄の飲物が、ずらりと並んで冷えている。見当たらないのは、赤ワインくらいだろうか。私は、白ワインの隣で肩身が狭そうにしている瓶詰めのコカコーラを一本、取り出して栓を抜いた。サイドボードの中で光を弾くグラス類を横目で眺めつつ、瓶のまま喇叭飲みをする。もちろん気のせいだろうが、コカコーラの痺れるような喉越しさえもが、上質に感じられた。美味しいな、と口に出して言いながら、ベッドルームへと向かう。歩きながら一気に飲み終えたコカコーラの空瓶をサイドテーブルの上に置き、クイーンサイズのベッドに身を横たえる。硬すぎず軟らかすぎず、しっくりと軀に馴染んでくる寝心地だった。一体これはど

ういう冗談なんだ？ と私は微笑をもらした。

昨夜、私が身を横たえたのは、アスマラのアンバサダーホテル五〇一
号室の、楽器みたいにやたらと軋むベッドだった。何故か獣臭くて閉口
させられた枕や、生乾きのバスタオル。それから洗面所で出くわした、
あの巨大な蛾。ところが一夜明けた翌日の晩、私はジュネーヴのレマン
湖のほとりにいて、国連の事務総長が味わうような心地好いベッドに身
を横たえている。

この落差は何なのだろうか？ これがつまり「戦争」と「平和」とのギ
ャップということなのだろうか。私はほんやりと考えた。

エリトリアが胸を熱くする国なら、ジュネーヴは懷を寒くする街だ。
金持ち限定の街、と言っても過言ではなからう。スイスは永世中立国と

あつて、レマン湖のほとりには、世界中の金持ちたちの別荘兼避難所が数多く建ち並んでいる。アラブの石油王の王子様か何かが、女とシケ込みたい一心で、パパに頼んで建ててもらった館、なんていうのがごろごろしているのだ。先刻ホテルの正面玄関で見かけたマラネロの持主もまた、そういう王子様の一人なのだろう。

夜の闇を弾き返すかのように黒光りするフェラーリ・マラネロ——あんな車、初めて見たな。腕枕をして宙に視点を漂わせたまま、私は夢見るように反芻した。マラネロばかりではない。今日一日の間に、自分は一体幾つもの「初めて」を目にしたろうか？ そのいずれもが「見た」のではなくて、「見せられた」ように思えてならないのは、どういふわけだろう。

最初は、雨を見せられた。

その日の午前中のことだ。私はまだエリトリアにいて、空港のゲート前に店を構えるバーでエスプレッソを飲んでいた。店と言っても、廃屋の庭先にテント地の屋根を張っただけの、粗末なものだ。日記をつけたりして、フライトまでの待ち時間を潰していたところへ、突然雨が降り出した。陽が翳ったかと思つて、ふと顔を上げた次の瞬間、テント地の屋根が狂つたように鳴り出した。一粒が親指ほどもありそうな雨粒が、猛烈な勢いで降り注いできたのだ。あたりは宵闇のように暗くなった。滝の真下で傘をさしているようなどしゃ降りだった。テント地の屋根を支える何本かの柱が、前後左右に揺さぶられて踊り出す。私たち一行は、

大慌てで廃屋の中へ逃げ込んだ。

「これはすごい雨ですネ」

と地元ガイドのマコーネン氏も顔を曇らせるほどの集中豪雨だった。

彼は祈るような仕種をして見せた。確かにそれは、天の力を知らしめられるような雨だった。

「こんな雨、生まれて初めて見た」

黙っているのが怖くて、私はマコーネン氏に話しかけた。が、その声は激しい雨音にかき消されて、彼の耳に届かなかった。「何ですカ!?」と大声で訊き返されたものの、私はもう一度言う氣を失くして、ただ苦笑いを浮かべて見せた。

と、次の瞬間、あたりは急に静かになった。

一拍遅れて、陽射しが燦々と降り注ぐ。空は嘘みたいに青く晴れ上がった。

時間にして一分足らずの、文字通り集中豪雨だった——エリトリアの空がくれた饑別はあまりにも強烈だった。私は大いに肝を冷やした。

そんな椿事の後に搭乗したエチオピア航空機の中で、私は幾つもの初めてを目にすることになる。アスマラとローマを結ぶ、昼の便だ。私は窓際の席に座って、窓外の眺めに目を奪われていた。

エリトリアという国は紅海沿いに在るから、飛び立つとすぐ航空機の右手、東側には、文字通り紅色の海が延々と続く。薄めた血のような色の海だ。それを越えれば、向こう側はアラビアなのだ。

やがて航空機が安定飛行に入ってしばらくは、眼下に黄土色の砂漠や

荒野が続く。退屈を感じて私は、エチオピア語の機内誌を手にとった。

巻末のフライト図のページを開く。アスマラローマ間のフライトコースを確かめるなり、私の胸は高鳴った。そこに記された通りの航路を飛ぶのだとしたら、自分は文明の大パノラマを一望することになる——私は額を窓に押し当てて、眼下の景色に目を凝らした。

黄土色一色だった地上の風景の中に、ぼつりぼつりと緑の色が見え始める。そして川が現れる。それは蛇行しながら広い範囲に緑を育み、ゆるやかに流れている。ナイル川だ。初めて見た。

航空機は母なるナイルの流れに沿って、しばらく北上を続けていた。

やがてカイロの市街地が近づく頃、一面黄土色の砂の風景の中に、ぼつん、ぼつんと四角い何かが見えている。真上からは四角形にしか見え

なかつた建物の影が、陽を浴びるなりくつきりと三角形をなして、砂の上に乗った。

ピラミッドだ。

私は座席の上で小躍りした。いつかは一度見てみたいと願っていた。ピラミッドを、よもや「真上」から見下ろすことになろうとは。僥倖を噛みしめる暇もなく、機首をやや西よりに向けたエチオピア航空機は、アレクサンドリアの上空に差しかかっていた。アレクサンドリア……御伽噺の中でしか耳にしたことがないような響きだ。眼下に白っぽい石造りの港街が広がる。そしてその街並みが途切れるところから、今度はコバルトブルーの地中海が始まるのだ。

私は目を見張った。

地中海の青は、思っていた以上に青かった。こんなにも美しい海がある——それだけで生きている甲斐があるように思えてくるほどだった。ボストーク一号からガガーリンが眺めた地球は、例えばこんなふうにかつたのではなからうか。そんなことを私は想像してみたりした。

その後、ローマで二時間のトランジットを経て搭乗したスイス航空機内でも、私はまたもや「初めて」を目にした。時刻は午後九時を過ぎていた。航空機は、月明かりにくつきりと照らし出されたアルプス山脈の上を飛んだのだ。積雪の白が月の光を弾き、山脈ぜんたいがぼうっと発光しながら立ち上がるかのようにだった。

集中豪雨の饑別に始まって、紅海からピラミッド、アレクサンドリア、地中海の青、月明かりのアルプスへと続く絵巻物を、私は見たのだろう

か。それとも見せられたのだっただろうか——いずれにしてもあまりにも沢山の、初めて〃を目にした長い一日の終わりに、黒いフェラーリ・マラネロが停まっていたのだった。

アスマラとジュネーヴ。これほど似ても似つかない街から街へ移動すること自体、私には初めての経験だった。

私は心地好いベッドの上で、何度めかの寝返りをうった。

目が冴えてなかなか眠れなかった。今しがたスイスビールの小瓶を飲んだりもしたのだが、一向に眠くならない。ひとつには、この分不相応な部屋のせいもあったろう。もうひとつには、翌々日に控えた国連難民高等弁務官との対談のせいもあった。エリトリアにいる間は、エリトリ

アのことだけを考えて過ごした——そのツケがここへきて回ってきたのである。

国連難民高等弁務官を相手に、戦争と平和について語る。そんなことが本当に自分にできるのだろうか？ 私はどんな話題をどう話し、どんな質問をするつもりなのか、まだ何も考えていなかった。横になって、それを考えようとすると、頭の中がもやもやしてきて、いつのまにか今日一日に見た、初めてのものに心がいたってしまった。この部屋を定宿にしていたというガリ元国連事務総長のよう、世界平和について考えているつもりが、いつのまにかホテル前に停まっていた黒のフェラーリのことを反芻したりしていたのだ。

またひとつ寝返りをうって、ベッドサイドの時計を確かめると、既に

午前二時を回っていた。

ふと、あのフェラーリ・マラネロをもう一度見ておきたいと思う。何だか今日一日で見た。初めては、いずれも二度と見られないもののような気がしていたのだ。私はしばらくベッドの中でぐずぐず迷っていたが、どうせ眠れないのだと自分に言いきかせて、起き上がった。

ジーンズに綿のシャツを羽織り、前のボタンを留めながらドレッシンルームへ向かう。洗面台の傍らに、ディレクターのT君から分けてもらったスイスフランが幾らか置いてある。それをポケットにしまい込み、私は静かに部屋を後にした。何しろ夜中の二時過ぎだ。フロントマンに怪しまれてもいけないので、私は煙草を買いに出てきたふりをするつもりでいた。他のスタッフたちが泊まっている部屋の前を通り、大理石の

らせん階段をゆっくり下りる。

幸いロビーには人気はなかった。奥にあるフロントにも、従業員の姿はない。私は足音をしのばせてロビーを横切り、回転ドアを押し表へ出た。

ひんやりと湿った夜気が頬を撫でる。綿のシャツ一枚では多少寒いくらいだ。息が白くはないことを確かめてから、私は右手の薄暗がりを目をやった。

そこには果して黒のフェラーリ・マラネロが停まっていた。闇の中で、敏捷な獣の眼のように輝いている。私は、吸い寄せられるように一歩ずつ、ゆっくりと近づいていった。すぐ脇を通り過ぎ、車の背後に回り込む。その後姿は絶品だった。T君ほどの車好きではない私が見ても、ぐ

つとくるものがある。私はしばらくの間、その後姿を惚れ惚れと眺めた。ホテル正面の馬車廻しの内側に植物が植えてあつて、その向こう側で輝く水銀灯の光が、マラネロの助手席側半分をぎらりと照らし出している。車体の横腹のラインに沿って視線を動かしていくうち、そこに映り込んでいる風景の方へふと気がいった。ほぼ同じ高さに刈り揃えた植え込みの中に一本、ひよろ長い物影が混じっている。

何だろうと思つて、馬車廻しの内側へ目をやると、それは一輪の花だった。周囲の緑とはまったく別の意志が働いたかのように、その花だけが一際高く、天に向かつて咲いている。

まさか、と思ひながら私はフェラーリの傍を離れ、馬車廻しを渡った。植え込みに近づいて確かめてみると、そのままかだった。それはエリト

リアの戦車の墓場にぽつんと一輪咲いていたのとまったく同じ、紅い花だった。下手なりにスケッチをしたおかげで、花卉ばかりではなく、葉の形や茎のあんばいまではつきりと覚えている。まず見間違いではない。あの殺伐とした戦争の残骸の中に咲いていたのと同じ花が、この平和な高級ホテルの植え込みの中にも咲いている——偶然そのものの力を見せつけられる思いだった。

花が何のために咲くのか、私は知らない。けれどこの時目にした紅い花は、私のために咲いていた。不思議だが、そうとしか考えられなかった。

国連難民高等弁務官への質問事項

〈挨拶〉〈自己紹介〉

〈番組主旨の説明〉

この番組は今、世界に飛び出して「戦争と平和」に何らかの形で関わり合いながら活躍している日本の若者たちを訪ね、話を聞いたり現状を見たりすることによって、彼らの考え方を探ろうという内容のもので、今日はそんなふう活躍のフィールドを世界へと広げた若者の大先輩に、

お話をうかがいたいと思います。がんばっている若者に対して、またがんばってない若者に対して、大先輩からのご意見、メッセージをいただければ幸いです。

〈海外へ飛び出していく日本の若者の増加をどう見るか？〉

単純に「増えた」ということを喜ぶべきだろうか。

彼らが国内ではなく海外へと考える理由はどこにあるか。

NGOに参加している或る青年は「日本はつまらない。海外の方が面白そう」と言っていたが、そういう好奇心だけで動いてしまっているのか？

日本がつまらないと簡単に言ってしまう考え方をどう思うか。

一方で「関係ない」と言って自分の周囲に壁を作って、閉じ籠もる若者も増えている。コミュニケーション不在、拒絶に対する方策は何か。行動できない日本の若者たちに対して。何をきっかけに、どう勇気を出せばいいのか。

日本は今、平和だけれど、幸福を感じていない若者たち。現代の幸福とは何か。

〈若き日の弁務官について〉

若い時代、「世界で働こう」と決めて動き始めた時のきっかけは何だったのか。迷いはなかったか。

個人の歴史の中で、例えば二十代というのはどういう時代？

二十代の弁務官を支えた言葉や考え方、あるいは書物などは？

若い時代の平和観と、現在の平和観とに違いはあるか？

その平和観と現代の若者たちの平和観とのギャップをどう思うか。

日本の若者与其他の国々の若者とは、違う平和観を抱いているか？

この先、日本の若者はどのような形で平和と関わっていくべきか。

〈現在の仕事ぶり〉

今現在関わっている仕事について。

何が原動力になっているのか？

満足感というのは、どんな時、どんな段階で得られるのか。

二十一世紀の平和のビジョンは？

冷戦が終わったと思ったら、今度は民族紛争。この状態は増えるのか減るのか。

果たしてどんな時代がくるのか？